

2019年度「QEガイドライン」について

社会経済学	目的	QEは、博士後期課程進学後における研究推進力、とりわけ博士論文に関わる諸研究の遂行に必要な基礎的素養を審査する。
	出題範囲	「社会経済学A/B」の範囲を中心に出題する。資本主義経済の歴史・理論・現状についての知識をもち、バランスよく理解していることが求められる。
	出題形式	試験は大問2題とする(選択式)。
	合格の目安	① 社会経済学の古典を読む力 ② 資本主義を分析するための基本的概念の理解
	リーディング・リスト	[1] マルクス『資本論』(大月書店) [2] デヴィット・ハーヴェイ『〈資本論〉入門』作品社、2011年 [3] デヴィット・ハーヴェイ『資本の〈謎〉』作品社、2012年 [4] 置塩信雄『蓄積論』筑摩書房、1976年 [5] 植村博恭・磯谷明德・海老塚明『社会経済システムの制度分析』名古屋大学出版会、2007年 [6] Bowles, S., R. Edward, F. Roosevelt and M.Larudee, Understanding Capitalism : competition, command, and change, Oxford University Press, 4th. ed. 2018
マクロ経済学	目的	マクロ経済学のQEでは、博士後期課程において動学的マクロ経済学の分野に関連する博士論文を執筆するために必要となる基礎的知識、及び、基礎的能力を評価する。
	出題範囲	「マクロ経済学A/B」の授業内容・授業水準に基づいて出題されます。出題対象は、ミクロの基礎付けを持つ動学的マクロモデルが中心となります。具体的には、成長理論、世代重複モデル、景気循環理論(リアルビジネスサイクルモデル・ニューケインジアンモデル)、消費理論、投資理論、サーチ理論、などの理解度と応用力を確かめる内容とする。また、動学モデルを解くために必要な最適化手法も出題の範囲とする。
	出題形式	試験は大問2から3題程度とします。
	合格の目安	基本的な動学最適化問題を解くことができ、動学マクロ経済モデルの持つ経済学的な含意が理解できていることが合格の目安となる。
	リーディング・リスト	[1] David Romer, Advanced Macroeconomics, 4th ed., McGraw-Hill, 2011, Ch.1-7. [2] Jianjun Miao, Economic Dynamics in Discrete Time, The MIT Press, 2014. [3] 齊藤誠『新しいマクロ経済学-クラシカルとケインジアンとの邂逅』, 有斐閣, 2006年. [4] 二神孝一『動学マクロ経済学 成長理論の発展』, 日本評論社, 2012年.
ミクロ経済学	目的	大学院修士課程の「コースワーク」として重要であり、博士論文研究を行う基礎力としてマスターしておくべき文献の中から、標準的な問題を出題する。試験内容は、理論を専門とする研究者だけでなく、広く応用分野の研究者にとっても有益な基礎的なものとし、博論研究を行う上での基礎力を十分身に着けているかどうかを審査することを目的とする。
	出題範囲	科目群「ミクロ経済学A/B」の範囲を中心とする。 内容は、完備情報の静学・動学ゲーム、ナッシュ均衡(混合戦略を含む)とサブゲーム完全ナッシュ均衡の求め方、およびこれら均衡概念を用いた経済モデル(寡占市場、交渉モデルなど)の分析、消費者理論、生産者理論、需要関数・供給関数の導出、一般均衡と経済厚生が含まれる。受験者は、試験を受けるにあたって、下記の文献の標準的な内容を十分理解しておくことが求められる。
	出題形式	[1][2]から総合的に2題程度出題する。
	合格の目安	基礎的・標準的な内容の十分な理解が合格には求められる。
	リーディング・リスト	[1]山崎 昭『ミクロ経済学』(知泉書館、2006年) [2]Robert Gibbons, Game Theory for Applied Economists, Princeton University Press,1992 (日本語訳『経済学のためのゲーム理論入門』ロバート ギボンズ(著), 福岡 正夫(訳), 須田伸一(訳) 創文社, 1995年)
	目的	博士後期課程において研究を遂行するために必要となる基礎があるかどうかを確認する。
経済史	出題範囲	下記リーディングリストは 比較経済史、制度派経済史、世界経済史(グローバル・ヒストリー)、の代表的文献である。このうち二つを選び、内容把握と議論の整理ができるかを問う。
	出題形式	試験は大問2題とする(選択式)
	合格の目安	① 経済史の問題領域に関する基礎知識 ② 基本的な論理展開 ③ 研究史の論点整理 ① ②が合格には必要とされる。また、③についても一定水準以上が望まれる。
	リーディング・リスト	[1]斎藤修 『比較経済発展論』一橋大学経済研究業書、岩波書店、2008年 [2]ダグラス・ノース 『経済史の構造と変化』日経BPクラシックス 2013年 [3]ケネス・ポメランツ『大分岐：中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会、2015年 [4]アンガス・マディソン『世界経済史概観』岩波書店、2015年
	目的	博士論文作成を行うにあたって必要となる基礎力が身につけているかを確認する。
計量経済学	出題範囲	出題範囲は、科目群「計量経済学A/B」の範囲を中心とする。一般化古典的回帰モデル(クロスセクション、時系列、パネル)、漸近理論、統計的推論、内生問題などが含まれる。
	出題形式	大問2題を出題する。
	合格の目安	標準的な計量経済学の理解、及び実証分析への応用力が認められる水準に達していることが、合格の目安となる。
	リーディング・リスト	[1]James H.Stock, Mark M.Watson, Introduction to Econometrics(Updated 3rd edition), Pearson,2014 [2]Jeffrey Wooldridge,Introductory Econometrics:A Modern Approach(6th edition),South-Western,2015 [3] 浅野 哲、中村 二郎、『計量経済学(第2版)』(有斐閣、2009年)